



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

明治期ライプチヒ大学留学生によるドイツ思想・文化受容の意義

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-01-31 キーワード: 作成者: 林, 正子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/3718

明治期ライプチヒ大学留学生による ドイツ思想・文化受容の意義

林 正子

はじめに

近代の国民国家建設の過程で、日本が憲法制度・軍事制度や、実験・基礎学問としての自然科学、とくに医学の分野においてドイツから多くを学んだことについては、もはや贅言を要しない。また、人文科学領域における学問の基盤づくりにおいても、ドイツからの影響が多であったことは、各分野での研究の百花繚乱ぶりが確固として示しているだろう。

本稿では、明治から大正期にかけて、すなわち前世紀転換期から二〇世紀初年にかけて受容されたドイツ思想・文化が、近代日本の知識人たちに国民国家確立期における国民文化構築の重要性について認識させるとともに、その国民文化そのものの発展に寄与した側面について論じることをめざしている。そのことは、自ずから、近代日本におけるドイツ思想・文化受容の様相そのものに、当時の国情や知識人の意識が反映していることを、併せて確

認することにもなるだろう。東京帝国大学創設期にドイツ哲学を学び、ドイツ思想・文化に甚大な憧憬を抱いてドイツに留学した近代日本の知識人たちが、帰国後、当時の時代精神を体現するオビニオン・リーダーとして八面六臂の活躍をしたことによって、日本では国民文化概念が形成されその成果が展開されるうえで、ドイツの思想・文化が重要な規範のひとつとなったことを確認しておきたい。^(注)

具体的には、『明治文学全集』（筑摩書房）にもその評論や小説作品が収録され、明治期にドイツに留学した代表的な哲学者・文学者として認知されている鷗外・森田太郎（一八六二～一九二二）、操山・大西祝（一八六四～一九〇〇）、嘲風・姉崎正治（一八七三～一九四九）、筑水・金子馬治（一八七〇～一九三七）、桑木巖翼（一八七四～一九四六）について、それぞれにおけるドイツ思想・文化受容の様相やその成果の概略をたどってゆく。

この五人のドイツ留学に共通しているのは、自らの専門分野を究めるために、一時期をライプチヒ大学で学んでいることである。一九世紀から二〇世紀にかけての世紀転換期に、日本の国費留学生たち——おもに人文・社会学者が学んだドイツの代表的な大学としては、ベルリン大学、ミュンヘン大学、ハイデルベルク大学等が挙げられるが、ハイデルベルク大学に次ぐ一四〇九年創立でドイツ第二の伝統を誇るライプチヒ大学が、近代日本の代表的な哲学研究者（鷗外の場合は陸軍軍医としての衛生学研究・軍事制度調査）にとって、必ずや学ぶべき大学とされていたことは特筆に値する。

しかも、後節で言及するように、そのライプチヒ大学で鷗外を除き、世界的に高名な心理学者ヴント (Wilhelm Wundt 1832~1920) のもとで学んでいることである。そもそもは哲学・教育学研究のためにドイツ留学を志した者たちが、ヴントの心理学演習にも出席し、帰国後、日本における心理学の発展にも寄与したのは、ひとえにこのヴント聴講体験に依拠していると考えられる。

ただし、本稿では、ライプチヒ大学に留学していたという理由でこの五人を取り上げるわけではなく、近代日本における国民文化の創造が希求された国民国家確立期、およびそれに先立つ時期

に、自らのドイツ留学体験をおしてドイツ思想・文化から多大の影響を受けた代表的な評論家を思いつくまに列挙してみるとこの五人となった、というのが実際のところである。したがって、ここでは、彼らが生活したライプチヒという都市について、各自の当地での留学体験を恣意的にドイツ思想・文化受容の意義と結びつけるのではなく、彼らのドイツ原体験となった留学地として指摘しておくにとどめたい。

現代のドイツでも政治的文化的に重要な都市のひとつであるライプチヒで、一九八九年の一月一七日に十二万人の、一週間後には三〇万人のデモがおこなわれ、旧東独内で起こった民主化運動でも改革運動の中心的役割を果たしたことは記憶に新しい。

ライプチヒのメッセは、古く一七〇年に端を發し、広範囲の商人たちを集結させていたことで知られ、その伝統は現在にまで引き継がれて国際的に著名な見本市となっている。また、地名の由来である〈菩提樹の地〉を意味する〈ヘリプツィ〉はスラブ語で、当初、この土地の西部、プライセ川とナイセ川の間地帯にはスラブ人の集落があり、その東側に接して、ハインリヒ一世の君臨した一〇世紀前半期までに、ドイツ人の集落がつけられたとされている。中世の時代、フランクフルト・アム・マインからシュレー

ジエンに通じるホーエラント街道とハレからプレスラウにいたる
ニーダー街道との東西に延びる二本の道、また地中海と北海とを
結ぶ南北の道路が交差する商業取引の中心地としても名高く、宗
教改革の時期には、人口九千から一万人というザクセン地方最大
の都市となっていた。

一六一八年から四八年にかけての宗教戦争——三十年戦争では
甚大な荒廃を喫したが、一八世紀になると再び東部ドイツの経済
的文化的中心地となり、とくにレクナム文庫など書籍出版の拠点
都市となる。その後、ライプチヒ大学には、ライプニッツ
(Gottfried Wilhelm Leibniz 1646～1716)、『ゲーテ (Johann
Wolfgang von Goethe 1749～1832)』、『フィヒテ (Johann
Gottlieb Fichte 1762～1814)』ら世界的な名声を博した哲学者
や文学者が学んでおり、またルター派の聖トーマス教会では、一
七二三年から一七五〇年まで、ヨハン・セバスティアン・バッハ
(Johann Sebastian Bach 1685～1750) が聖歌隊指揮者兼オル
ガン奏者として活躍したことも人口に膾炙し、ライプチヒの名を
高からしめている。

一八一三年一〇月の諸国民戦争では、プロイセン、オーストリ
ア、ロシアの連合軍がナポレオンを破って解放戦争の勝利をもた
らし、高さ九一メートルの記念碑が建造されたのは、一八九八

(明治三二)年から一九二二(大正二)年にかけてのこと。後節
で述べるように、それは、大西祝、姉崎正治、金子筑水、桑木殿
翼がライプチヒに滞在していた時期に重なる。また、かつて一五
一九年六月にルター (Martin Luther 1483～1546) とインゴ
ルシュタット大学教授エックの大論争が展開された、ゲオルク公
のプライセン城のあった場所に、一八九九(明治三二)年から一
九〇五(明治三八)年にかけて、新市庁舎が建造されている。す
なわち、本稿で検討しようとする近代日本の五人の評論家たちは、
ライプチヒで歴史的建造物の建設プロセスを目の当たりにし、イ
ンフラストラクチャーに具現化されたその国力を感得するととも
に、ドイツの学問の伝統と文化の香気を堪能する留学生活を送っ
たとと言えるのである。

一世紀前の日本人留学生に体験された歴史的建造物ということ
でさらに挙げれば、ライプチヒの中心部カール・マルクス広場か
ら南に下ったバイエリッシェン・ホーフは、一八四二年の建設で、
現存最古のドイツの旅客用鉄道駅。鴨外も頻繁に利用したことが
『獨逸日記』からうかがえる。そのバイエリッシェン・ホーフか
らさらに南下すると、八〇〇万冊を超える全ドイツ語出版物を収
集しているドイツ蔵書庫があり、古代から中世、印刷術の発明・
発展を経て現代にいたる文書の発達史をたどることができるこの

図書館もまた、歴代の日本人留学生に多大の恩恵をもたらした知の宝庫として注目されるだろう。

また、旧市庁舎の裏手にあるナッシュ広場の道路一つ隔てた南側、メドラー・バサージュの地下にあるアウエルバッハ・ケラーは一五三〇年の開店で、学生時代のゲーテが頻繁に訪れたことで知られ、それゆえ鷗外をはじめ日本人留学生たちが、好んでこの酒蔵で飲食したエピソードが残されている。たとえば、鷗外の『獨逸日記』明治一八（一八八五）年二月二七日の項には、アウエルバッハ・ケラーにおいて、『ファウスト』を漢詩体で翻訳することを井上哲次郎（一八五五―一九四四）と語らったことなどが記されている。

とまれ、このライプチヒで学んだ近代日本の評論家たちにとって、ライプチヒを始めとするドイツの都市での留学体験は、どのようなドイツ思想・文化受容の営為や成果をもたらしたのか、そしてその営為や成果は、当時の国民文化の展開にどのような役割を果たしたのか——以下の節で確認してゆきたい。

一、他者理解と自己認識の練磨——森鷗外

陸軍軍医総監として明治官僚国家体制の一角を担った鷗外の場合は、既にドイツ留学生活において、その後の人生行路を先取り

するかのような公私の葛藤を象徴的に体験していると言える。明治一七（一八八四）年から明治二一（一八八八）年までの四年間を、ライプチヒ、ドレスデン、ミュンヘン、ベルリンで衛生学研究と軍事制度調査に携わった鷗外は、帰国後、日本の本格的な近代小説としての劈頭を飾った『舞姫』（「國民之友」一八九〇年一月）、『うたかたの記』（「しがらみ草紙」一八九〇年八月）、『文づかひ』（「新著百種」一八九一年一月）のドイツ三部作を発表するとともに、その卓抜なドイツ語力を生かして、『ファウスト』を始め一三〇編を超える小説・戯曲作品等を翻訳し、日本文学の近代化に多大の貢献を果たした。前掲の『ファウスト』翻訳を想起したことを始め、鷗外にとってライプチヒ時代はドイツ文学への開眼期と言ってよい。

鷗外の全人生が木下李太郎（一八八五―一九四五）によって『ターベス百門の大都』と称され多方面の業績が揚げられたように、鷗外のドイツ思想・文化受容の実相と意義もまた、『ターベス百門の大都』の感があるが、今回は、一九世紀から二〇世紀への転換期における鷗外によるドイツ思想受容の成果として、当時のドイツ哲学・美学の著作の翻訳や紹介、当時の西欧で生じていた黄禍論に関する研究の成果を再確認しておきたい。

ドイツから帰国して四年後の明治二五（一八九二）年九月、鷗

外は慶應義塾で美学の講義を担当することになるが、その時期に東京専門学校で美学講師を勤めていたのが、東京帝国大学最初の美学専攻卒業生である大塚保治（一八六八〜一九三一）であり、また、その東京帝国大学文科大学哲学科では、外山正一（一九四八〜一九〇〇）が美学講師としてハルトマン (Edvard von Hartmann 1842〜1906) の来日を要請し、結果的にはその弟子であるケーベル (Raphael Koerber 1848〜1923) が赴任してゐる。当時の東京帝国大学でドイツ美学研究・教育の移植・向上に、なみなみならぬ意欲が傾注されていた実態が察せられよう。

そのケーベルは、明治二六（一八九三）年に来日して以降、大正三（一九一四）年までの二一年間、哲学・美学・西洋古典学の講義をおこない、漱石・夏目金之助（一八六七〜一九一六）を始め、後節で論じる橋本・高山林次郎（一八七二〜一九〇二）、姉崎正治、桑木嚴翼の他、上田敏（一八七四〜一九一六）、波多野精一（一八七七〜一九五〇）ら明治初年代に生まれた文学者・哲学者、さらには阿部次郎（一八八三〜一九五九）、安倍能成（一八八三〜一九六六）、和辻哲郎（一八八九〜一九六〇）といった、漱石に私淑した大正教養主義の体現者たちも、東京帝国大学文科大学でケーベルの薫陶を受けている。さらに、この点についても後節で論じたいが、大正期——一九二〇年代に隆盛をきわめたへ

文化主義〉は、ケーベルや漱石の門下生を中心に体现化された教養主義的傾向とも呼応し、たんなる知識ではなく、人間がその素質を精神的・全人的に開花し発展させるために学び養われる学問や芸術を尊重するその思潮の根源には、ドイツ思想の受容が影響を与えていたと言えるのである。

鵜外自身の場合に立ち返ると、文学・美術批評に際して、ハルトマン美学に依拠した鵜外は、そのハルトマンの著作 *Philosophie des Schönen* (1887) のうち、*Der Begriff des Schönen* と *Das Dasein des Schönen* を要約的に翻訳しているのを始め、フォルケルト (Johannes Volkelt 1848〜1930) の *Ästhetische Zeitfragen* やリープマン (Otto Liebmann 1840〜1912) の著書も縮訳している。

シューベンハウアー (Arthur Schopenhauer 1788〜1860) の〈生の意志〉とハーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel 1770〜1831) の〈理性〉を結びつけた〈無意識者〉を万有の根源とする立場を主張したハルトマン哲学を翻訳したことは、鵜外のドイツ哲学に関する知識や感性の精度を表わしていると言えよう。

また、鵜外がニーチェの存在を知るのは、日清戦争の勃発する明治二七（一八九四）年のことであり、当時ドイツ留学から帰国した東京帝国大学医学部の後輩から、デンマークの文芸批評家フ

ランデス (Georg Morris Brandes 1842~1927) の「貴族的過激派——フリードリヒ・ニーチェ論」を収録する哲学・文学論文集『作家と作品』など何冊かの新刊書を借用し、シヨールペンハウアー哲学から派生した二潮流の一方としてのニーチェという存在に関心をもつことになる。しかしながら、この時期の鴉外のニーチェ理解はまだ本質的な理解からはほど遠く、鴉外がニーチェ自身の著作に親炙するようになったのは、それから一〇年後の明治三七(一九〇四)年から翌年にかけての日露戦争以後のこと——厳密には、明治三九(一九〇六)年刊行のナウマン版ニーチェ全集を入手して以降のことと推測される。

すなわち、明治四〇(一九〇七)年一月に陸軍軍医総監・陸軍省医務局長に就任して以降、鴉外は〈豊熟の時代〉と呼ばれるほどの旺盛な文学活動を展開し、その時期の小説作品において、主人公が自らの生きざまを問うような場面に、ニーチェの『善悪の彼岸』『人間的な、余りに人間的な』『ツァラトゥストラ』などからの引用が散見され、この時期の鴉外がニーチェに関心を寄せていたことは歴然としているからである。

また、鴉外のドイツ留学体験やドイツ思想の受容が導き出した、当時においては独自の成果のひとつとして、黄禍論研究を挙げておきたい。〈黄禍〉というスローガンを手掛かりに、帝国主義の

本性とその思考方法にアプローチした著書、ゴルヴィッツァー (Heinz Gollwitzer) の『黄禍論とは何か』(一九六二)に拠れば、〈黄禍〉は日清戦争期に西ヨーロッパ・ライン河の西の地域から発生、流布してゆき、当時のドイツ皇帝ヴィルヘルム二世がこれを一枚の絵画に具象化し宣伝したということである。その後明治三三(一九〇〇)年に義和団の反乱が起こり、明治三七(一九〇四)年に日露戦争が勃発して、黄禍論は頂点に達したとされている。

鴉外の黄禍論関係の業績としては、「北清事件の一面の觀察」(一九〇一年二月)、「洋學の盛衰を論ず」(一九〇二年三月)、「人種哲學梗概」(一九〇三年六月)などの講演の他、『黄禍論梗概』(一九〇四年五月)などの黄禍論研究も刊行し、また日露戦争従軍時の『うた日記』(一九〇七年九月)には、「黄禍」(一九〇四年八月一七日)の詩も掲載している。

このうち、「人種哲學梗概」はフランスの外交官ゴビノー (Joseph Arthur Comte de Gobineau 1816~1882) が著わした、その古代アリア人の優越を唱える論が後にナチズムに悪用された『人種不平等論』(Essai sur l'Inégalité des Races Humaines 1853)の解説であり、黄禍論の源泉を明らかにしたものである。このゴビノーの著書をドイツ語訳で読んだ鴉外は、

へ或る人種が唯一の開化力の己れに或るといふことを、説くのを喜んで聴くに至るのは、或はその唯一だといふことを自ら信ずることの薄くなつた時に在る」とコメントしている。自信のなさが他者への恐怖や嫌悪感となつて現われるという人間心理を指摘したものと云えるだろう。

『黄禍論梗概』は、バルト海地方出身の作家サムソン・ヒンメルスチュエルナ (H. v. Samson-Himmelsfjerna 1826-1908) による『道徳問題としての黄禍』(Die Gelbe Gefahr als Moralproblem 1902) の系統的な要約である。〈黄禍〉の存在を確信している著者サムソン・ヒンメルスチュエルナが、その〈黄禍〉に対してドイツの国内改革と平和的手段で臨むべきだという信念をもっており、〈キリスト教の布教活動や資本主義が引き起こしたような暴力で、『黄禍』を撃退することはもはやできない〉と述べていることが、鵬外によって紹介されている。

この『黄禍論梗概』の「例言」で、鵬外は、愚かな白人優越論は無視すべきだという世評に対して、〈侮を受けて自ら知らざるもの、いかでか能く侮を禦ぐ策を講せん〉と訴え、〈日露の戦は今正に酣なり。而して我軍愈勝たば、黄禍論の勢愈加はるべし。黄禍論の講究は實に目下の急務なり〉と警告を発している。鵬外がドイツに留学したのは、ヨーロッパで露骨なかたちでの黄禍論

の生ずる以前とは言え、自らドイツに身を置いた体験をもつ鵬外には、国際状況のなかでの日本および日本人の位置を直観的に把握することが可能になったがゆえに、危機感も一層であったのだろう。すなわち、右に挙げた黄禍論に関する鵬外の業績は、ドイツ思想それ自体の受容ということではないが、実際のドイツ留学体験をとおしての実感や洞察による成果として注目されるのである。

そして、このような鵬外の黄禍論に関する著作の翻訳・紹介や〈白禍〉を指摘する作品を導き出したのは、後節で言及するように、時期的・内容的に見て、まさに当時の代表的総合雑誌「太陽」(博文館 一八九五年一月〜一九二八年二月) に掲載された高山樗牛や姉崎正治らによるドイツ文明批評や、姉崎正治による洋行無用論であったと見なされる。^(注4)

総体的に見れば、鵬外の場合のドイツ思想・文化受容の意義は、その留学体験にもとづく小説作品の創作や翻訳活動をとおしての〈日本文学〉の創造にあってと言えるが、そこには日本文学一新の責務が、自分たち近代ドイツの思想・文化を吸収した者にあるという自負が強く抱かれていた。

〈学問的真理の要求に内面的に対決する精神、エートス〉を育成するためには、ドイツ思想・文化の輸入に奔走するのではなく、

ドイツ精神そのものを理解しその精神と発展過程との結びつきを認識することが重要であるという鷗外の見解は、後の大正期——一九一〇年代の半ばからは、一連の歴史小説の執筆によって、自己（日本人）の内面そのものの探究へと向かってゆく。そこには、明治官僚国家体制の歯車の一輪として生きた鷗外自身の精神の姿が投影され、国家対個人の構図が描かれることになったのである。¹⁰⁶

以上のように、他者理解と自己認識の練磨を唱える鷗外の文学活動の根源に、ドイツ留学体験とその思想の受容による自己客観化の営為が厳然と存在していると見なされるのである。

二、自己言及的批評精神の育成——大西祝

それでは、自らの批評の立脚地をカント (Immanuel Kant 1724~1804) の批判的理性に置き、哲学を文明諸学批判の学問として、近代日本の評論をジャンルとして確立させた哲学者・大西祝によるドイツ思想の受容の意義はどのようなものであったのだろうか。

東京帝国大学文科大学哲学科を卒業して、東京専門学校の教壇に立っていた大西祝は、留学時点で既に旺盛な評論活動を展開していたが、夙に明治二三（一八九〇）年二月発表の「獨逸哲學と

英國哲學」（「哲學會雜誌」第三六号）において、ドイツ哲学の「高遠幽玄の理に入り物界を觀破して萬法の根本に達せん」とする体系性を高く評価する一方で、「空理に走るの癖あり」と批判し、またイギリス哲学については、「實用を求むるの傾きある」ために、「皮相の解説に安じ、或いは高遠幽玄なる理論を避け、或は切れ切れの説に満足して集大成を求めざるの欠點あるも、亦毎に明白なる經驗上の事實に立ち戻り之を根拠とするの傾向あるが故に、空漠無の議論を避くるの利益あり」として、イギリスの倫理学を高く評価してもいた。

大西祝の場合には、ドイツ留学以前から、既にドイツ哲学を始めとする西洋思想に造詣が深く、実際に、カントの批判哲学とアーノルドの批評主義が組み合わされて初めて、「理性のみに基づいた批評をいかなる対象についても行わなければならない」とする彼の批評主義は成立したと言えるのである。¹⁰⁷

その大西祝は、明治三二（一八九八）年二月にドイツ留学の途に就き、まずイエナ大学でオイケン (Rudolf Eucken 1846~1926) や前掲リープマンの講義に出席している。

唯物論や自然主義に対抗した新理想主義思想で知られるオイケンは、精神生活の意義を強調し、一種の普遍宗教を構想するその哲学が、とくに明治末期から大正期にかけての日本の文壇・論壇

で紹介されている。大西祝が後輩や教え子に伝えた言葉からは、自らの思想と通うオイケンの哲学に早くも注目していたことがうかがえるが、そのオイケンの形而上的な〈生の哲学〉は、留学時の大西祝には〈Gehramkeit〉(博識・博学)に流れて哲学を狭小なる範囲に収縮してしまうというように、否定的な印象が抱かれている。

それに対して、リープマンに対する大西の理解は、新カント派のなかでも異色の哲学者であるというものであり、最も批評的なるまた最も明瞭鋭利なる思想家のひとりとして、その徹底的・分析的な批評性に惹かれていることが察せられる。

また、ドイツ留学中に大西祝が「哲學雜誌」(第一三九号—八九八年九月)に寄せた書簡には、フィヒテ(Johann Gottlieb Fichte 1762—1814)が創立した哲学会に参加したときの体験が、〈Prof. Bucken, Prof. Erhardt等も列席致され小生も会員に候故遂に夜の明くるまで席に列し候。是は日本になき一のものにて候。此會には必ずフィヒテの名を三回高く呼んで其功績を記念することに候。徹夜の飲つづけには閉口仕候」と記されている。大西は早くも明治二二(一八八九)年四月発表の「方今思想界の要務」のなかで既にフィヒテに言及しており、カントの認識論的主観概念を絶対的的自我へと拡張し、倫理的な色彩の強い観念論の

体系を樹立したフィヒテは、大西祝にとってその建設的批評観ゆえに規範となるべき哲学者であったと推測されるのである。

さらに、ドイツ留学中の大西のドイツ哲学者との関わりをたどってみると、イエナ大学留学時代には、ニーチェが宿泊したというベンシオンを数回にわたって訪問しているというエピソードには、哲学者の人生そのものにも関心を寄せた大西祝の人間的な感性がうかがえるだろう。

大西祝は、ドイツ到着後一学期を経ての明治三一(一八九八)年一月には、イエナ大学からライプチヒ大学へと移り、ヘライプチヒ大学にては主としてヴント氏及びフォルケルト氏の講義を聴き傍、多方面の学課に出入りし、且つ汎く現代の思潮につきて研究する所ありき(姉崎正治「大西祝君を追懐す」「哲學雜誌」第一七二号—一九〇一年)という学究生活を送っている。

明治八(一八七五)年にライプチヒ大学の哲学教授となっていたヴントは、感覚生理学の技法を用い内観による意識の研究をおこなって、実験室も開設。カリキュラムに心理学演習を編成し、学位論文提出のシステムを整えたのも、ヴントの功績である。心理学という学問の成立が、ライプチヒ大学でのヴントの心理学実験室開設に拠ると言われる所以である。そのヴントのもとに学んだ大西祝は、姉崎に宛ててヴントの講義が「最も聞き所ある」も

のであったと書き送っている。

また、フォルケルトと大西祝の交流は、東京専門学校での教え子である梁川・網島栄一郎（一八七三—一九〇七）によって綴られた大西祝の「略傳」（『丁酉倫理會倫理講演集』三四〇号 一九三一年二月）に次のように紹介されている。

先生一日フォルケルト氏を訪ふ、氏先生に對つて曰はく、君は一見學生の如くなれども、君と語るに及びては、君の既に學生時代の人にあらざるを知る、願はくは君の經歷を聴くことを得んかと。蓋し先生の為人は端なくフォルケルト氏が好奇の念を動かしたるなり。先生のライブチヒに在るや、某氏の家族と同居し、毎夕食後には、文藝學術その他さまざまの事につきて家族と語るを常とせり。時としてはフォルケルト氏的美學講義の筆記を読み聴かせ、時としては我が國風又は新體詩を獨譯しなどして、談笑の間に獨逸語に熟達せんことを務めたり。

フォルケルトは、ショーペンハウアー、ハルトマン、ニーチェからも影響を受けた批判主義的形而上学者で、美学者として心理学的基礎の上に立った規範的美学を主張している哲学者。そのフォ

ルケルトをして、大西祝に対する〈好奇の念〉を抱かしたというエピソードは、大西祝の醸し出した人物としてのアウラのみならず、彼の批評論に代表されるような深淵な思想をうかがわせる雰囲気にあつたのではないかと推測される。ちなみに、大西祝がドイツ留学をとおして師事したりブマンやフォルケルトの著作について、前節で触れたように、ほとんど同時期に森鷗外が翻訳を進め刊行していることから、当時の日本の知識人によってこれらのドイツ哲学者が注目されていたことがうかがえよう。

大西祝は、イエナ大学留学中の一八九八（明治三一）年六月に盲腸炎を患い、翌年二月のライブチヒ大学留学中には重症のインフルエンザに罹っている。神経衰弱も高じて、オーストリアやハンガリーで保養するが全快せず、結局、帰国の途に就き、この年明治三年七月に神戸に到着。前年の七月には、京都帝国大学に増設される文科大学長のポストを約束されていたが、病気のためにその地位に就くことはなかった。わずか三六歳で、翌年明治三三（一九〇〇）年一月に亡くなっている。

大西祝のドイツ留学体験そのものの成果は、彼の天逝によって、その後の日本の哲学界に君臨することはなかったが、西洋思想の移入にともなう近代日本の混迷した時代精神の状況に対して、中国思想・インド思想・西洋思想の批評をとおして新たな日本思想

を構築すべきであるという大西祝の主張は、近代日本の国民文化構築のうえで、看過されるべきではないだろう。

ドイツ思想の受容をおしての大西祝の批評論は、西洋を根源から特徴づけている思想自体の解明の重要性が意識されたうえで展開されており、また方法の認識とこの発想こそが、大西祝の批評論がカントの認識論(Kritik)から深く影響を受けていたことを象徴的に表わしている。カントの認識論に対応する大西祝の批評論は、知識が「我」という主体によって構成されたものであると認識することによって、知識自体を生み出した原理や方法を認識化することになり、そこに大西祝の批評論が自己言及的になつた必然性があるということだろう。大西祝におけるドイツ思想受容の意義について、批評とは何かをつねに批評し続ける、自己言及的な批評精神の育成と表現する所以である。

三、精神的闘争のためのバックボーン確立——姉崎正治

森鷗外、大西祝に続いて、ライプチヒ大学に留学した近代日本の知識人として、次に宗教哲学者の嘲風・姉崎正治の場合を述べたい。その姉崎におけるドイツ思想・文化受容の意義を考察しようとする、彼の盟友であり、明治二〇年代後半から三〇年代半ばまで——一九世紀から二〇世紀への世紀転換期、雑誌「太陽」

の主筆として八面六臂の活躍をした評論家・高山樗牛についても言及しないわけにゆかない。

姉崎正治を論じるにあたって樗牛を引き合いに出すのは、樗牛と姉崎のふたりが東京帝国大学文科大学哲学科で同級生・桑木巖翼らとともに、当時の学長・外山正一、主任教授・井上哲次郎、ドイツ人教授・ケーベルらの薫陶を受けるなか、「太陽」と同時期の明治二八(一八九五)年一月に創刊された文科大学の機関誌「帝國文學」を舞台に、文芸・哲学・宗教・時事評論などの分野で意見交換、切磋琢磨する関係にあったからである。すなわち、樗牛と姉崎は、教師や学友から受けたショーペンハウアー、ニーチェ、ハルトマンを始めとするドイツ思想・哲学についての知識・情報を共有していただけでなく、国民国家形成期の帝国主義的な時代状況のなかで、「日本主義」という国家主義を提唱する樗牛と、その対立側の個人を尊重する立場の姉崎というように、それぞれ拮抗する主義を信奉していた時期、また「太陽」や「帝國文學」を發表舞台に、個人主義Ⅱ主観主義を標榜する華麗な文章を掲載することによって、青年知識人たちに多大の感化を及ぼした時期を有しており、このような樗牛と姉崎の関係性そのものに、当時の時代思潮の奔流のすがたが投影されていると考えられるからである。

ドイツ留学先から姉崎は、「太陽」の編集主幹として時代の寵児であった樗牛に宛てて公開書簡を送り、その樗牛と姉崎の応酬が「太陽」誌上に掲載されている。姉崎は、明治三三（一九〇〇）年三月末に日本を出発し、ニーチェの学友でありショーペンハウアー哲学の流れを汲むインド哲学研究者、キール大学のドイセン（Paul Deussen 1845～1919）のもとで学ぶ。意気揚々とドイツに留学した姉崎を待ち受けていたのが、前掲のヴィルヘルム二世の黄禍論であった。姉崎のキール到着は、北清で義和団の乱が勃発し、北京駐在のドイツ公使が殺害されたために、ドイツ軍がヴィルヘルム二世の匈奴演説に激励を受けて、キールの軍港から北京遠征に向かう時期に当たっていたのである。

明治三五（一九〇二）年二月と三月、「太陽」に発表された「高山樗牛に答ふるの書」には、親友の樗牛のドイツ留学がかなわなくなったことに対する姉崎の心遣いが記されるとともに、〈夢伯林士〉（ベルリンを夢見る男）というペン・ネームを用いるほどのドイツ文明崇拜者であった自らの幻想が、ドイツ留学後に粉々に崩れ去ったことを激白している。

具体的には、渡独前の姉崎が憧憬の念を寄せていたドイツの思想界は〈萬葉凋落〉の時であり、一九世紀前半に創り上げられた哲学・文学の古典的時代は、以後、それに次ぐ人物の輩出を見ず、

〈國家の統一と國運の隆昌〉が逆に国民を〈根本的修養〉から遠ざけ、表面的な〈愛國自負のみを増進〉して、もはや資本主義の〈物質文明〉と〈帝國主義〉とを謳歌する国になってしまっている、という深い嘆きと痛烈な批判だった。

姉崎にとって、〈ドイツの今の盟主たるプロイセンほどモナルキスチックの國〉はなく、〈カイゼルが一度演説して支那をうちこらし、千年の後までも其痛みを感じしめよといへば、萬民忽に之に和し、文明の皮を脱して蠻行を演じ、下走卒児童に至るまで支那人黄色人種を惡み、路行く我等に對してまでも石を投じ罵詈を放つ〉という事態に身を置く事になる。そして、長年の憧憬の地に夢と意欲をもってたどり着いた矢先、愛憎の念に揺れ動くアソビバンレントな心情を抱かざるを得なかった姉崎の衝撃と憤懣は、〈日本の教育家皮相の觀察をなす人々が、忠君愛國の好標本としてドイツを崇拜し、何事も皆之に模倣せんとするは或は偶然にあらざるべし〉と、日本文明への大いなる危機感として語られている。

いずれにしても、姉崎がこのようなドイツ体験をとおして〈洋行無用論〉を提唱した文章「高山樗牛に答ふるの書」に対する反応・反駁の代表的なものが、前掲の森鷗外の場合で、姉崎のドイツ文明批評は、たとえば鷗外の反駁を導き出さずにはおかないイ

ンパクトをもっていたと言えよう。そしてこのような姉崎のドイツ留学通信が、当時一〇万部の発行部数を誇った「太陽」に掲載されることで、とくに多くの青年知識人たちにドイツ思想・文化に関する情報を提供し、自国の国情への相対的・客観的な認識を深めさせていったと推測されるのである。

さらに翻って、ドイツ文明批評にとどまらず、むしろドイツ文明に盲従し、その悪弊までも模倣している日本人への警告や日本文明への危機感が切々とつづられている姉崎の樗牛宛て書簡には、愛憎相半ばしながらも捨て去ることのできないドイツ文明への期待が論じられている。姉崎が「貴ぶべき精神の活動」と賞賛したのは、ドイツ・ロマン派の作曲家ヴァーグナー (Wilhelm Richard Wagner 1813-83) とスイス人画家ベックリン (Arnold Böcklin 1827-1901) であり、ふたりの芸術が俗化した文明に対しての「反抗」であり「改革」の営為であった点を高く評価している。

明治三五(一九〇二)年三月、四月に「太陽」に掲載された姉崎の「高山君に贈る」は、キール大学からライプチヒ大学に移って、ニーチュェの同級生ウィンディッシュ (Ernst Windisch 1844-1916) のもとで学んでいた時に綴ったもので、前便に引き続き、ヴァーグナーへの心酔ぶりが表現され、オペラ「タンホイ

ザー」に「道徳」を振りかざす世間への「諷刺」を見て最大級の共感を示している。樗牛と姉崎の往復書簡を貫流しているのが、俗化した文明の「改革」と世間の道徳への「反抗」であることが、改めて確認される。すなわち、樗牛や姉崎にとって、ニーチュェやヴァーグナーの思想は、自らの精神的闘争の模範であり典拠であったと言ってよい。

開国以降、さまざまな様相を呈しながら近代日本に浸透していったドイツ思想・文化は、明治生まれの樗牛や姉崎の世代が活躍した二〇世紀初年の日本において、知識人たちの精神の深淵部まで到達している。換言すれば、その自我の覚醒をとおして生じた魂の煩悶が、溢れんばかりの批評精神とともに綴られ、読者の深層部に届くことになった時代の精神的支柱として、この時期の樗牛や姉崎におけるドイツ思想・文化受容の意義をとらえることができるのではないだろうか。^(注)

四、〈新理想主義〉的文芸思想の実現——金子筑水

西田幾多郎と同年の明治三(一八七〇)年生まれの子筑水は、東京専門学校文学科第一回生として、文学を逍遙・坪内雄蔵(一八五九-一九三五)に、哲学を大西祝に学んでいる。筑水の思想・文芸観の形成上、このふたりの師からの影響が甚大であったこと

が推測され、実際にその影響の軌跡をたどることも可能である。

東京専門学校卒業後の筑水は、母校の教壇に立ち、英語・倫理学・教育学を担当し、早稲田大学文学部哲学科の創設精神を体現化した人物と見なされている。その機関誌「早稲田文學」にも、ショーペンハウアー、カント、フィヒテ論など、ドイツ哲学・文学関係の論説を掲載しているが、それらの論説には、後の明治末年から大正期にかけて——一九一〇年代の「太陽」に展開された、筑水の〈新理想主義〉の萌芽が既に見られる。

筑水は、姉崎と同年の明治三三（一九〇〇）年九月、海外留学制度による東京専門学校文学科第一回の留学生（哲学研究）として出発、まずはハイデルベルク大学に留学し、翌年明治三四（一九〇一）年三月にはライプチヒ大学に転学する。ライプチヒでは、師である大西祝も心酔していたヴントのもとで、心理学・哲学・論理学を学び、姉崎正治や中国哲学者の服部宇之吉（一八六七—一九三九）らとも交友している。

ちなみに、筑水と同時期にヴントの講義に出ていたのが、慶應義塾大学部文学科の第一回卒業生（明治二五年卒業）で、教育養成のために慶應義塾から派遣されていた川合貞一（一八七〇—一九五五）で、川合は明治三二（一八九九）年八月から三年半にわたってドイツに留学している。日本人として初めてヴントの心理

学研究室の客員となり、帰国後は慶應義塾で民族心理学を講じている。

筑水自身は、明治三五（一九〇二）年五月、ライプチヒから「早稲田文學」に「書信」を寄せ、ヴァーグナーの「タンホイザー」などの楽劇に接して、ドイツ文化と音楽の親密な関係を痛感したこと、ヴントの『近世哲学史』、フォルケルトの『美論』、フリッカー『法理哲学』『倫理』などを日本に紹介することの必要性を強調している。この夏には、ミュンヘンやヴァイマルを旅行し、ドイツの生活を楽しむとともに、秋からはベルリン大学で学んでいる。

翌年明治三六（一九〇三）年、スコットランド生まれのイギリスの歴史家ファーガソン（Adam Ferguson 1723—1816）の道徳哲学について学位論文「Moral Philosophie Adam Fergusons」（「アダム・ファーガソンの道徳哲学」）をまとめ、ライプチヒ大学に提出して博士号を取得した筑水は、パリ・ロンドン経由で帰国の途に就き、ロンドン留学中の抱月・島村瀧太郎（一八七一—一九一八）と旧交を温め、翌年一月に神戸港に到着。ドイツへの出発前と同様、引き続き、母校の早稲田大学講師として倫理学・心理学を担当し、翌年明治三八（一九〇五）年に帰国した抱月とともに、逍遥門下の双璧として早稲田大学文学部発展のた

めに尽力することになる。

その筑水は、「中央公論」明治三九（一九〇六）年四月号掲載の「文藝の將來」において、同時期にドイツ留学をしライプチヒでも同学であった姉崎と通うようなニーチェ、ヴァーグナー論を展開しており、当時のドイツ文壇の趨勢については、自然主義の代表的作家ハウプトマン（Gerhart Hauptmann 1862～1946）やズーダーマン（Hermann Sudermann 1857～1928）を紹介している。筑水によれば、ヘウグナーの神秘的兼感性的戀愛、ニーチェの「ユーバー、メンシュ」、ハウプトマンの標象主義、此等は未だ明確なる理想主義とは謂ふべからざるも、少なくとも、此の方面に轉せんとする傾向を示せるものゝであるともなし、当時のドイツ哲学界・文学界に関して、正確な理解をしていることがうかがえる。

この「文藝の將來」で、筑水は〈新理想主義を取るにあらずば、將さに大に勃興せんとする國民の文藝を如何にすべきぞ。偉大なる藝術は、必や時代精神に先きんじて而して時代精神を率ふ、今や有力なる新代は將さに勃興せんとしつつあり、將來の藝術にして、此の有力なる新代を統率するの力なくんば、それは二十世紀の藝術にはあらずして、時代に率いらるる憐ふべき藝術たるに過ぎざる也〉と、高揚した論調で〈新理想主義〉を標榜している。

このように、近代ドイツの文芸思想界の趨勢を論じることで、日本文芸の將來を照射しようとする発想は、前掲の樗牛と姉崎の往復書簡に既に表現されていたものと重なるが、筑水の主張する〈新理想主義〉が日本文壇における傾向として顕著になるのは、さらに五、六年の年月が必要であった。

翌年明治四〇（一九〇七）年に早稲田大学教授となった筑水は、明治四三（一九一〇）年七月には、「太陽」文芸時評欄担当者として、大正二（一九一三）年二月までの三年半、「太陽」を舞台に充実した執筆活動を展開している。なかでも明治四三（一九一〇）年一月発表の「ルドルフ、オイケン」には、パーゼル大学・イエナ大学を歴任し、筑水の哲学の恩師である大西祝自身も師事したオイケンの思想が紹介されている。

オイケンとは、既に触れたように、一九世紀後半の実証主義的・唯物論的思潮に異論を唱え、精神的生命の意義を説く〈新理想主義〉の哲学・宗教論を展開しているが、その〈新理想主義〉とは、近代文明を批判して、非人間的になった文化の當為のしがらみから人間の心を解放し、新しい〈内の生命〉、純粹な倫理的・精神的活動を創造することを意味している。

このように精神的なものを見直してその優位を説く〈新理想主義〉は、自然主義・実証主義・唯物論などへの反動として、一九

世紀後半から起こった思潮であり、哲学上では新カント派、オイケン、ベルクソン (Henri Bergson 1859~1941) らの思想を、広義には現象学や生の哲学を含み、文芸上ではトルストイらの人道主義的な作品を意味している。自然主義の行き詰まりを打開すべく、新たな精神生活の建設を呼びかけたオイケンらの〈新理想主義〉は、まさに筑水の文芸思想のバック・ボーンとなったことが、その主張の類縁性によって推測されるのである。

また、大正二(一九一三)年一月の「太陽」には、ニーチェの生活意志の哲学、価値転倒の新道徳などについて解説した「和辻氏の『ニーチェ研究』」も発表している。日本の論壇・文壇では、明治三〇年代——一九〇〇年頃に橋牛による〈美的生活論争〉を始めとするニーチェ・ブームが起こっていたが、明治末年から大正初年代にかけて、ベルクソンに続いて再び注目されたのがニーチェだった。この時期の日本におけるニーチェ研究や紹介は、個人の内面を追究し理想主義的な人格主義を提唱するコンテクストで為されているのが特徴的である。筑水自身は、このニーチェの思想が評論・解釈のかたちで明瞭に表わされている処女作と晩年の大著を、『悲劇の出生・善悪の彼岸』(早稲田大学出版部 一九一五年二月)として翻訳・刊行している。

さらに、筑水は「太陽」誌上で、ホーフマンスタール (Hugo

von Hofmannsthal 1874~1929) からドイツ語圏作家を紹介しているが、明治四四(一九一)年六月号の「近代文藝の二種類」では、多種多様な近代文学を、フランス文学など〈観照的〉なものと、ドイツ、スカンジナビア、ロシア文学などの〈実行的〉なものに分類することに妥当性を見出した上で、近代ドイツの〈自然派の文藝〉を論じたドイツの批評家の説を紹介している。そして、当時のドイツ現代文学の特質を、〈メタフィジカル又はフィロソフィカル〉、すなわち〈人生観的又は窮境統一的、人生を統一的に纏めて観ずる傾向〉をもっているものと論じ、その適例として〈印象的自然派と呼ばれるデーメル (Richard Demmel 1863~1920) を挙げ、さらにヴェーデキント (Frank Wedekind 1864~1918) やハウプトマンの名前も列挙している。ドイツ、ロシア、スカンジナビアの文芸は、〈一種ミステックな宗教的な趣味〉が著しく、〈弊害の方面から見れば、妙に陰鬱で暗澹として晦渋で且わざとらしい怪異に走りやすい傾き〉があるけれども、〈長所としての方面から見れば、シンセリチが有りバイエチーが有り、深みがある、どこことなくおそかな趣致の有る所が、此等北方文藝の特色〉であるとして、具体的にニーチェ、イプセン (Henrik Ibsen 1828~1906) 、トルストイ (Lew Nikolaevich Tolstoi 1828~1910) 、ドストエフスキ (Fyodor Mikhailo-

vich Dostoevskii 1821~1881)らの「著しく宗教的でミスチック」であることを主張している。

このように、筑水は、哲学者としての客観的思考、美学者としての繊細な感性、文芸批評家としての正確な分析力を兼ね備えた人物だった。哲学の真髄を追究する過程で生み出された筑水の「新理想主義」は、近代日本がドイツ哲学を中心とする欧米の哲学を受容することで生じた確執・葛藤から、そして、明治後半期の日本の思想・文芸界を席捲した自然主義運動の渦中から躍動的に出現したものであり、この時代思潮への多大の関心が、近代日本の精神的風土の現実を凝視させることになったと考えられるのである。

筑水は、日本における哲学研究・文学研究いずれにおいても、相対的に地味な扱いしかなされていなく、実際には、そのドイツ思想・文化受容をとおしての日本文壇批評、自然主義を超越しようとする思想、時代精神の真相を洞察する見識は、「国民文化」創造の一翼を担った原動力として、決して看過されるべきではないだろう。¹⁷⁾

五、〈文化主義〉の導入と推進——桑木嚴翼

東京帝国大学文科哲学科主任教授の井上哲次郎から〈文科

大學の豊年時代〉(「大學時代の高山君」「太陽」一九〇三年三月)と呼ばれた哲学科の俊才たち、高山樗牛や姉崎正治の同級生であったのが桑木嚴翼である。桑木は、哲学科主任教授の井上哲次郎や理想主義的倫理を解説した中島力造(一八五八~一九一八)に師事し、元良勇次郎(一八五八~一九二二)からも実験心理学を学んでいる。とくに始業第一日に受講したケーベルの「哲学概論」に感銘を受け、そのケーベルからの推薦でショーペンハウアーの著作を知ることになる。

継続して、中島力造の「カント實行理性批判」の講義やケーベルの「カント判断力批判」の演習を履修し、「カント學年」と呼ばれるほどにカントの大著を学ぶ機会に恵まれている。このようにして、桑木は、純粹理性的な哲学であるカントの批判哲学に傾倒してゆくことになり、明治三二(一八九九)年、病に倒れた大西祝の後任として、東京専門学校で哲学概論・哲学史・論理学・心理学を講義し、続いて第一高等学校教授として論理学と心理学を、東京帝国大学文科大学講師として認識論の講義を担当している。

桑木自身のドイツ留学は同級生たちと比較すると遅い方で、明治四〇(一九〇七)年六月、二年間の留学の途に就く。最初の留学地ベルリン大学では、とくにギリシャ哲学に造詣が深く、新カ

ント派の隆盛に先駆的役割を果たしたツェラー (Edhard Zeller 1814~1908) 哲学講座主任で、カント哲学の实在論的・反形而上学的な傾向を論じたリール (Alois Riehl 1844~1924) らの講義を受講している。認識論を専攻し、美学・自然哲学・批評主義の講義や演習をおしてカント哲学の精神を学び、この折に修得した批判的実存主義の知識は、その後の桑木によるカント研究の原動力となったことが推測される。

桑木がベルリン大学で学んだのは、〈自然科学〉と〈文化科学〉とを明確に区別し、〈文化的価値〉の独自の領域とその検討方法の自立性を認識論的に基礎づけようとする新カント派の哲学であった。しかしながら、第一次世界大戦を契機として、思想的には〈生の哲学〉、現象学、マルクス主義などの登場によって、ヴィルヘルム体制下のドイツの知識人たちが依拠した新カント派の〈文化価値〉は退いてゆくことになる。

新カント派の光茫は西洋ではわずかの期間であったが、日本の哲学界においては影響力多大の思想であり、桑木はその新カント派をつうじて、カントを始めとするドイツ哲学にさらに造詣を深め、カントの批評哲学を立脚点としていたリールや西南ドイツ学派の影響を受けていると言えよう。

ベルリン滞在中の桑木は、明治四一(一九〇八)年七月末から、

南ドイツ、スウェーデン、イタリアを旅行し、ドレスデン、ヴァイマル、イエナでは、ゲテとシラー (Johann Christoph Friedrich von Schiller 1759~1805) の遺跡を見物している。その後、ライプチヒ大学に移り、大西祝、姉崎正治、金子筑水も受講したヴントやフォルケルトから学んでいる。

二年間のドイツ留学を終えて、明治四二(一九〇九)年九月に帰国した桑木は、京都帝国大学に赴任し、カントの『純粋理性批判』をテキストにした演習を開講しているが、五年後の大正三(一九一四)年、恩師ケーベルの後任として東京帝国大学文科大戦が勃発し、桑木は「枯渇の虞ある思想の源泉」(「東京朝日新聞」一九一四年八月一七日)を執筆して、ドイツと日本の戦争が継続されれば、ドイツ思想から恩恵を受けている日本の思想の源泉が枯渇すると憂えている。

この桑木の危惧に対して、泡鳴・岩野美衛(一八七三~一九二〇)が「桑木博士に與ふ」(「讀賣新聞」一九一四年二月八日)を執筆して、日本の思想は日本の〈源泉〉から発し、〈獨特の歴史〉を有しているにもかかわらず、〈外國崇拜〉に陥ってしまった、肝心の日本思想について無視しているような〈研究の根本態度〉は肯定できないと、桑木を批判。桑木は、泡鳴の非難に反駁

する。「若野泡鳴氏に答ふ」(「讀賣新聞」一九一四年一月一日)を記して、日本古来の思想にも現代の思想にも自分は満足することができないため、〈國內思想本位の人々〉とは与し得ない、そもそも思想には〈外來〉というようなものはないと反論し、普遍性を追究するにあたっては日本も外国もないという見地を示している。

これに対して、泡鳴は「再び桑木博士へ」(「讀賣新聞」一九一四年二月一八日)を書き、思想の〈長短〉は〈國民性〉に限定されていること、〈獨創性のない〉西洋からの借り着に終始していることを例に挙げて、東京帝国大学の一派を批判している。神道にもとづく〈日本主義〉を標榜する泡鳴にとって、東京帝国大学文科哲学科の学者たちによる新カント派の認識論の移入とその人格主義の提唱は、日本の伝統的な思想や精神性を考慮しない皮相浅薄な〈外國崇拜〉に映ったと推測される。

続けて桑木は、「現今の哲學問題」(「哲學雜誌」一九一五年一月)において、〈認識主觀〉としての〈我〉を、個人的な〈我〉を超越する普遍的な〈公我〉とし、普遍的な〈先驗的主觀〉としての〈公我〉によって、もろもろの価値を位置づけるという見地から、人格的生活の理想を〈眞善美〉という〈文化價值〉の実現に置いている。それは、ドイツ伝統の〈Kultur〉に発する〈文

化主義〉を、その哲學的基礎とともにデモクラシーの高まる日本に導入したもので、大正期に隆盛を極めたいわゆる〈文化主義〉、〈教養主義〉、〈人格主義〉の展開であったと言える。それは、泡鳴が批判していたように、確かに外來思想の移入ではあったが、たんなる表層的な摂取ではなく、むしろ固有の文化を尊重する普遍的な精神そのものの受容であったと評価することができるように思われる。

大正六(一九一七)年一月、桑木は、カント哲学の優れた解説書であるとともに、桑木自身の哲學的見地を示した代表的著作『カントと現代の哲学』を上梓する。ここでは、〈哲學上の問題は純然たる客觀的實在ではなく、この實在と主觀、即ち自我との間に存する關係である。我と物との關係は物が我に對して或る價值を有するものと見られ、我が物を統一するものとして解釋せられる。その故に哲學は價值の學ともいひ、或は自我の學とも称せられる。その執るところは批判的方法で、帰するところ知識文化等の先驗的基礎を求め、其の絶對的價值を確立することになる〉と述べ、〈文化哲學〉とは〈文化の知識哲學〉あるいは〈論理學〉であると規定している。

大正後半期——一九一〇年代の終りから二〇年代にかけて日本で隆盛をきわめた〈文化主義〉の定義は、〈人間生活の最高の目

的を文化の向上に置き、文化価値の実現をめざしていこうとする立場〉、〈文化をすべてに優先させることによって、社会生活の基準とする立場〉と『日本国語大辞典』（第二版）（小学館 二〇〇一年一月）に記述されているが、このような〈文化主義〉の隆盛は、桑木にしたがえば、〈文化〉こそが種々の〈価値〉に優る至上の体系であり、その実現こそが当時における焦眉の急であるという意識のあらわれであったと考えられる。

このような大正期の〈文化主義〉は、明治期における性急な近代化や、富国強兵の手段としての文明開化や実学志向に対する批判として登場した。それは、日本における近代化の目標や理念を、人道主義的、理想主義的な立場から改めて再構築しようとするもので、自ら拠って立つ精神的基盤が希求されていたと言える。

当時、第一次世界大戦を契機に、飛躍的な発展を遂げた日本の資本主義は、内包する多くの矛盾を暴露し、相次ぐ恐慌によってその存在基盤が脅かされてゆく。その一方で、階級的対立の激化は、それまでの自己の内面しか向けられていなかった国民のまなざしを外界に向かって開かせ、自己自身のレゾン・デートルを問い直させる契機になったと考えられる。

続く昭和期——一九二〇年代後半の時代状況を受けて、思想界の動向としても、マルクス主義哲学やレーニン主義の展開、認識

論である新カント派から存在論である新ヘーゲル主義への転換、〈生の哲学〉や実存哲学の人間主義と論理実証主義である科学主義の分裂、ファシズムを掲げる日本主義の台頭等々が顕著となり、時代思潮は混迷を極める。このような日本国家の歴史的状況は、もはや桑木の依拠する新カント派哲学の理想主義では対応することのできない局面を迎えていたと推測される。

昭和一二（一九三七）年七月、デカルト（René Descartes 1596～1650）の『方法論』出版三〇〇年記念を兼ねたパリでの万国哲学会に出席し帰国した桑木を待っていたのは、日支事変勃発の知らせであり、理性尊重・人格尊重が社会の向上にも繋がるという、桑木が唱えたりベラルな〈文化主義〉も、軍部の統制のもと退潮へと追いつまされてゆく。

そして、第二次世界大戦後、日本は軍国主義・帝国主義的な暴走への猛省を迫られ、その反省のうえに立った内発的・自主的な再建こそが焦眉の急とされた時代、それまで政治のことにあまり関心を寄せなかった桑木は、文化と政治が乖離したことが近代日本に悲劇をもたらし、知識人の政治的関心の喪失が軍国主義の跳梁跋扈を許したのだと顧みる。このような弊害を克服するためにこそ、桑木は従来唱えてきた〈文化主義〉の再興の必要性を改めて痛感したのであろう。

桑木と同様に、社会学者の森戸辰男（一八八八〜一九八四）も、敗戦の翌年四月の「中央公論」に掲載した「文化国家論」において、〈もう一度国際社会に伸びてゆく日本の姿が文化国家でなければならぬ〉という提言をなし、〈わが国は敗戦国として当分の間、武力的にはもちろん政治的にも経済的にも、有力国家として、国際場裡に再び台頭する見込みがない、文化国家こそ残された唯一の道〉であるという状況分析をし、〈かつてナポレオン戦争に負けたドイツは、「フランスは陸を支配し、イギリスは海を支配し、ドイツは空を支配する」といって自ら慰めたというが、現に空（学術思想）を支配していない日本は、これを将来に期し、文化国家の提唱によって自ら慰め、自ら励ましているとも考えられる〉と述べている。

とまれ、〈文化主義〉提唱の立て役者であった桑木嚴翼の学問的行路と時代状況を鑑みるとき、明治維新後の生まれの桑木が、同窓の高山樗牛や姉崎正治と同様に、国民国家形成期・確立期に、日本（＝自己）の存在意義との関わりで、西洋思想・文化の受容の位相をとらえようとしていたことが確認される。すなわち、桑木は、哲学という分野で近代日本が内包する根源的課題に向き合い、伝統的な思想との葛藤を意識しながら、日本人の内面に浸透し定着した認識論の意義を追究しようとしたと言えるのではない

だろうか。^(注)

六、明治期ライプチヒ大学留学生による

ドイツ思想・文化受容の意義

以上、本稿では、森鷗外、大西祝、姉崎正治、金子筑水、桑木嚴翼、五人の評論家のライプチヒ大学留学と帰国後のドイツ思想・文化受容を通しての評論活動とその思想上の成果の一端を垣間見た。明治期にライプチヒ大学で学んだ人文科学者——心理学を専攻、あるいは専門分野との関連で心理学に関心を寄せ、とくにヴェントのもとを訪ねた研究者としては、他に、井上哲次郎、野尻精一（一八六〇〜一九三二）、大瀬甚太郎（一八六五〜一九四四）、松本亦太郎（一八六五〜一九四三）、前掲の川合貞一、谷本富（一八六七〜一九四六）、塚原政次（一八七二〜一九四六）、元良勇次郎、吉田熊次（一八七四〜一九六四）、桑田芳蔵（一八八二〜一九六七）らが知られている。^(注)

このうち、同志社英学校を経て、第一高等中学校に入学、そこで漱石・夏目金之助（一八六七〜一九一六）と同級生であった松本亦太郎は、明治三三（一八九〇）年、東京帝国大学文科大学に入学し、元良勇次郎のもとで心理学を学んでいる。明治一九（一八九六）年にアメリカ留学、イェール大学教授ラッド（George

Trumbull Ladd 1842~1921) の推薦で、スクリプチュア (E. W. Scripture 1864~1945) に師事し、“Reserches on acoustic space” (『音空間の研究』) で博士号を取得。師のスクリプチュアが、ライプチヒ大学で博士号を取得していたこともあり、松本は、明治三二(一八九八)年に、高等師範学校長の嘉納治五郎(一八六〇~一九三八)の配慮によりドイツへの官費留学をすることになる。七月にはライプチヒ大学のヴントのもとに移るが、心理学を直接の目的として官費留学を命じられたケースは、日本ではこれが初めてであった。

明治三三(一九〇〇)年に帰国した松本亦太郎は、高等師範学校で心理学、応用心理学、実験心理学を担当し、東京帝国大学文科大学での嘱託講義・演習では、ヴントの『生理学的心理学原理』や『心理学概論第四版』、『哲学入門』などのテキストを用いてヴント心理学に依拠した授業を展開している。さらに、明治三六(一九〇三)年の東京帝国大学文科大学での心理学実験室をはじめとする近代日本の初期段階での心理学実験室の開設に関わったこともまた、松本の功績と見なされている。

明治三九(一九〇六)年に、京都帝国大学文科大学で日本最初の心理学講座教授に就任した松本は、精神的動作の実験研究を展開し、授業でもヴントの英訳著書を用いた。明治四一(一九〇八)

年二月に心理研究会を、東京帝国大学に移籍する直前の大正二(一九一三)年五月には実験心理学会を設立している。⁽¹⁶⁾

明治期ライプチヒ大学留学生によるドイツ思想・文化受容の意義を論じるというテーマにおいては、この松本亦太郎を始め右に挙げた心理学者たちによる、ヴント心理学の導入をおしてのドイツ思想・文化受容の意義もまた論究すべき重要な課題であろうが、明治期文壇で活躍した評論家という観点から、今回は、前節までに言及した五人の評論家におけるドイツ思想・文化受容の成果の一端を論じるとどまった。だが、帰国後の論壇・文壇での活躍によって当時の時代精神を先導する役割を果たした、という条件設定をした場合、明治期ライプチヒ大学留学生としてこの五人の評論家を挙げる妥当性はあるのではないだろうか。

とまれ、既に指摘したように、他者理解と自己認識の練磨として、自己言及的な批評精神の育成として、精神的闘争のバック・ボーンの確立として、〈新理想主義〉的文芸思想の実現として、〈文化主義〉の導入と推進として、森鷗外、大西祝、姉崎正治、金子筑水、桑木嚴翼によって受容されたドイツ思想・文化は、それぞれ評論活動の典拠であり原動力となり得たと言えるのではないだろうか。

いわゆる日清・日露戦争を閲しての国民国家確立期、近代日本

における国民文化の創造が希求された時代の知識人たちによるドイツ思想・文化の受容をとおして、時代精神そのものを自己（個人）の問題として真摯に論じる、〈近代〉という時代の精神的基盤が構築されていったこと、すなわちドイツ思想・文化の受容によって確立された精神的基盤が、現代日本の文明社会の根源に存在し、文化概念自体の成立の礎石となっていたことが確認されるのである。

注

(1) 本稿のテーマと関連する拙稿収録の著書として次のものがあるので、参照されたい。

- ① 岐阜大学地域科学部編著『東京ブックレット④ いのちを問う』（東京新聞出版局 一九九九年九月）
- ② 酒井敏・原國人編著『森鷗外論集 歴史に聞く』（新典社二〇〇〇年五月）
- ③ 末永豊・津田雅夫編著『文化と風土の諸相』（文理閣 二〇〇〇年一〇月）
- ④ 鈴木貞美編著『雑誌「太陽」と国民文化の形成』（思文閣出版 二〇〇一年七月）

⑤ 稲生勝・津田雅夫・林正子・洞澤伸著『文化的近代を問う』（文理閣 二〇〇四年一月）

(2) 注(1) ②掲載の林正子「日清・日露戦争間のドイツ思想・文化論の意義——鷗外と梶牛・嘲風の評論活動を視座として」参照。

(3) 林正子「鷗外文学における近代日本超克への道程——西洋文化受容を通しての鷗外精神史——」（『日本の科学者』通卷三二五号 一九九四年四月）参照。

(4) 注(1) ⑤掲載の林正子「近代日本の評論における〈批評〉の成立——明治期〈批評〉論の展開と大西祝「批評論」の意義——」参照。

(5) 平山洋「大西祝とその時代」（日本図書センター 一九八九年七月）「V 留学・療養・死 2 欧州留学」参照。

(6) 注(1) ①掲載の林正子「〈生の哲学〉の展開——一九二〇年代初頭の日本文壇の生命主義——」、③掲載の同「近代日本における〈文化〉の誕生——〈文明〉から〈文化〉へ、〈教養思想〉から〈文化主義〉へ——」、④掲載の同「太陽」に読む明治日本のドイツ文明批評と自己探究——ドイツ関連記事と梶牛・嘲風の評論を視座として——」参照。

(7) 林正子「金子筑水の〈両性問題〉論——「太陽」掲載の論説を視座として」（『岐阜大学国語国文学』第二六号 一九九九年三月）、同「太陽」における金子筑水の〈新理想主義〉——ドイツ思想・文化受

容と近代日本精神論」(「日本研究」第一九集 一九九九年六月) 参照。

(8) 林正子「桑木嚴翼の〈文化主義〉——提唱の必然性と歴史的展開」(「岐阜大学国語国文学」第二十七号 二〇〇〇年三月) 参照。

(9) 佐藤達哉・溝口元編著『通史 日本の心理学』(北大路書房 一九九七年十一月)「I部 欧米の心理学の導入と受容」4章 心理学研究の自立…学会・留学・実験 4節 明治期における心理学関連留学の実際」参照。

(10) 注(9)「I部 欧米の心理学の導入と受容」4章 心理学研究の自立…学会・留学・実験 3節 松本亦太郎」参照。